

ゴリラ研究者

Juichi Yamagiwa

## 山極寿一

人間に最も近い存在・類人猿。中でもゴリラは高い知能を持ち、家族をひとつの社会単位として生活する点でも非常に興味深い存在である。ゴリラ研究者である山極寿一氏はアフリカで何度もフィールドワークを行い、世界的に貴重な研究成果を挙げている。最近ではゴリラの研究にとどまらず、そこから派生した人間の家族の問題、とりわけ「父親という存在」への関心を高めてきた。子育てに積極的に参加するゴリラと人間の父親は、霊長類としても特殊な存在なのである。また、地球温暖化や激しい内戦によって数を減らしているゴリラの保護についても、貴重なお話を伺うことができた。



双子のゴリラとお母さんゴリラ。人間と同じようにゴリラの顔はそれぞれ違う。鼻についた模様などで個体を認識できる(写真提供：山極寿一氏)。

# 「ゴリラから『人間』を学ぶ」

——山極先生は、アフリカでのフィールドワークを通じてゴリラの生態を研究してこられました。長年の研究の成果で、ゴリラの言葉も少しお話しになれますし、若いオスゴリラの鼻歌もまねできる。アフリカの森で雨が降ったときには、木の洞でゴリラと一緒に雨宿りもなさったと伺っています。

しかし、先生が本格的にゴリラ研究に取り組まれるまで、霊長類研究では世界の先端を走ってきた日本がこの分野では後れを取っていたとか。  
山極 僕がゴリラをやるようになったのは、恩師の伊谷純一郎先生から「ゴリラを研究してみないか」と言われたのがきっかけ。もともと日本の霊長類学者が最初にやるうと思った類人猿はゴリラでした。それができなかったという思いが強かったんです。先生に言われて動物園にゴリラを見に行っ

て、「これはすごいな」と思いました。ゴリラは人間を超えているという気がしたんです。チンパンジーにしてもニホンザルにしても、彼らはどこかで人間を恐れている、こちらは勝てるという気に

## 家族で送ったアフリカ生活

——『愛は霧のかなたに』という映画にもなった、女性研究者のダイアン・フォッシーさんがゴリラ研究の先駆者でした。  
山極 学問上の師は伊谷先生ですが、フィールドでの僕の師はフォッシーさんです。

——彼女はゴリラの研究や保護に大きな功績を残しましたが、一方では現地の人々に辛く当たり、結局殺されてしまいました。  
山極 彼女はゴリラを保護しようとして、現地の人々にゴリラを見せないようにしたんです。密猟者と区別がつかなくなるから、と。

なります。しかしゴリラには勝てない。気構えというのか、彼らが発しているものが全く違うんです。これは面白そうだと思って、七八年からゴリラの研究を始めました。でも、手ごわかったです。

黒人でない僕は、白人と同じ扱いで現場に行けましたけれど。その一方で、ゴリラ保護の資金を作るため、一般の白人にはお金をもらってゴリラを見せる。それはどうしても恨みを買いますね。

僕はフォッシーさんにいろいろな教えを受けましたが、現地の人と溶け込まない点だけは反面教師にしようと考えていました。現地の人たちにゴリラを知ってもらわないことには、ゴリラや彼らを取り巻く環境の保護はできません。一度、フォッシーさんたち白人が留守になるクリスマスに、現地の

スタッフと一緒に料理を持ち寄ってパーティーをやったところ、非常に喜ばれましたね。「こんなことは初めてだ」と。彼らはもともと農民で、狩猟採集民とは違いますが、森を知らなかった。でも、森という異質な場所に来てお金のために働いているうちに、森が好きになってきたんです。ところがゴリラは見せてもらえない。これではいけない。

一度日本に戻り、その後予算をとって、八六年にコンゴ共和国のカフジに行きました。カフジの西には広大なゴリラの生息地が広がっていたんです。そっちはまだ人がゴリラを食べていたし、まったく未踏の地。それならそちらへ向かおうと考えました。そのときには相棒を作りました。白人が調査するのではなく、現地研究者と一緒にやれるような体制を作ろうと考えたわけです。そのときにちよ



現地スタッフと一緒に調査や環境保護に取り組み山極教授(右)。密林の奥深く分け入り、ゴリラのルールを守って、何カ月あるいは何年もかけて根気強く近づいていけば、彼らは穏やかな顔で迎えてくれるという。好奇心いっぱいの子供ゴリラがカメラを構える山極教授に恐る恐る近づいてきた(左)(写真提供:山極寿一氏)。

かりのザイル人の研究者がいたので、彼と組みました。

八八年から九一年まで研究をしたのですが、八九年と九一年は家族も連れて行ったんです。八九年のとき、うちの息子と娘は四歳と二歳です。僕は山でテント生活を送ることが多かったのですが、家族は研究所の中にほったらかし。でも子供たちはすぐになじんで、幼稚園にも通っていたため友達はずいできました。スワヒリ語はもちろん、幼稚園で習うフランス語もペラペラ。その代わり、寄生虫はもらいし、皮膚病などありとあらゆる病気にかかりましたね。日本に帰ってきたらすごく大きな回虫が出てきて、これは霊長類研究所の獣医が「標本にするから」と喜んで持っていきました(笑)。当時鍛えられたせいとか、子供たちも今は丈夫になりましたけれど。

——日本の清潔すぎる環境は世界的には特異でしょうから。

山極 その後隣国のルワンダで悲惨な内戦が起き、たくさん難民が流入し、さらにザイルでも内戦が起こってフィールドワークが続けられなくなりましたのが

残念です。カフジに入れなくなったため、僕は「研究難民」になりました。結局九五年からガボンでフィールドワークを始め、〇二年からゴリラのヒト付け(餌をやらずに野生動物を馴らす)に取り組んだのです。昨年になって、ようやくヒト付けに成功しました。この地域に生息しているのは西ローランドゴリラです。

以前研究していた野生のゴリラは東ローランドゴリラとマウンテンゴリラでしたので、彼らの生態は大体わかっていましたが、西ローランドゴリラは随分違いました。メスがとにかく攻撃的なんです。世界の動物園にいるのはほとんどこの西ローランドゴリラです。上野動物園の「ゴリラの森」で飼われているゴリラもそうですが、ここでは一〇年ほど前からゴリラを群れで飼う試みを始めました。野生のように複数のメスをオスと組み合わせたら、メスたちが連合してオスを追いかけて回した。まるでいじめてみたいなんです(笑)。なんでこんなにメスの気性が激しいんだろうと不思議でしたが、野生の西ローランドゴリ

ラを研究してみるとやっぱりメスが強いんです。僕たちにも攻撃的で、それをオスが「まあまあ」というふうを抑える。

——メスはどんなふうに着地悪をするのですか。

山極 よく馴れたマウンテンゴリラのメスでも僕の膝の上に突然ドンッと座ってどかなかったりね。僕をからかっている。重いんですよ。西ローランドゴリラのメスはオスが近くにいないことを確かめてから、わざわざ攻撃してくる。僕らが怖がることを知っているんです。

## 失われゆくアフリカの文化

——食べるために殺した歴史がある上に、内戦でたくさんゴリラが殺され、森を追われていく。最近では「ブッシュ・ミート」と言われる野生動物の食肉商取引も盛んだと聞きました。人間が彼らをどんどん追い詰めています。環境破壊の影響も見過ごせません。先生は今地元のNGO「ポレポレ基金」を支援されるなど、ご尽力されていますけれど、現在起きている問題について、整理していただ

けますか。

す。西は人々が伝統的にゴリラを殺して食べてきましたから、ゴリラは相当敵意を持っている。それを解くのに四年かかりました。今ではオスや子供はすぐそばまで近づいてきますね。だけどまだ、メスはダメ。これからどうやって彼女たちを籠絡ろうかくしようかと(笑)。何しろ力が強いのでね。人間を殺したことはありませんが、尻を咬まれたとか、オスゴリラが猟犬を引き裂いて殺すところを見たとか、物騒な話はたくさんあります。

山極 保護というのは地元の人意識で大きく変わるものです。現地の人は昔から野生動物を食べてきた。しかし、人口が増えればそういう食生活をずっと維持することはできません。人間がどんどん野生動物の生息地に入っていくような状況では、両者がうまく共存していく道を探らなければならぬ。お互い楽しく生きられたほうがいいし、ばったり出会

って恐怖を感じるような関係ではいけない。

ポレポレ基金はそのための試みなんです。地元の若者の代表だから、保護する側だけでなく、ゴリラや象、チンパンジーに畑を荒らされて困っている人とか、昔から野生動物を狩猟してきた部族の人たちにも入ってもらおう。そういう人たちと共に、この自然の恵みの豊かさを、将来の世代に財産として伝えていかねばなりません。『職業』としての財産ではなく、自分たちの『心のふるさと』という財産として。

これは実は、彼ら自身が育んできたものだと思うんです。山と森と川があり、動物たちがいて、我々の祖先は時にはそれを狩って暮らしてきた。自然がなくなり、動物が絶滅したら、そういう暮らしぶりを復元できなくなってしまう。言葉がどんどん失われ、生活様式が欧米化されていくわけでしょうか？ それはどんなに豊かで美しく見えても借りてきた文化じゃないかということを知っています。自分たちの文化の香りを残すためには、それを育んだ

ものを残さなくてはいけないと、現地の人々も気がつき始めたわけなんです。

今、アフリカの各地で地元の文化が消滅しようとしています。言葉や美しい民族衣装のように、既に失われてしまった文化があります。かつてのような住居もない。写真もないから、復元しようがない。だから我々は、地元の人々を尊重するという形で、彼らと協力していきたい。その象徴がゴリラなんです。世界の人々の注目を集めるためには、「ここがゴリラのすみかなんです。ここにはゴリラと共存してきた独特な人々の文化があるんです」というのが一番ですから。

—— 現金経済に取り込まれると、それまでの生活が壊れるのは日本も同じですね。

山極 そうでしょうね。僕はガボンでも積極的に現地の人たちと話をするようにしているんですが、彼らの土地には五〇年代から八六年まで、伐採会社が入り、まるで白人の王国のような村を形成していました。バーはできるし、電気も来る。何千人という現地人にお

金が落ちる。だけど撤退したらそれまでです。

その後で僕たちが入っていったので、最初は「いくら金を持ってきた。いつ橋を直してくれるのか」という病院を建ててくれるのか」というふうには言われませんでした。ところがこっちはお金がない。それがだんだんわかって、今では彼らにビールをおごってもらうこともしばしばあります(笑)。物価の高いガボンでは、僕らの生活費より彼らの給料のほうが高いものですから。石油が出るので医療費はタダ同然だし、野菜などの日常的な食料品も輸入に頼っている。国や企業が何

でもやってくれるかと思っただけで、仲間と協力して村おこしをしようとはしない。伝統を守ろうという気持ちもあまりない。年寄りの権威が弱いんですね。喧嘩けんかが起ると收拾しじゅうがつかなくなる。昔だったら例え話なんかしながら論ずる長老がいたはずなんです。伝統を失ったために、模範になるような体験が見つからない。

—— 日本でも、伝統文化を受け継いでいる地域のほうが、安定しているように思います。

山極 以前作家の重松清さんと対談したときも、同じようなことをおっしゃっていました。都市の二



成長したオスゴリラは、背中が雪のように白くなるためシルバーバックと呼ばれる。1頭のシルバーバックを中心に、複数のメスとその子供たちで群れをつくって暮らしている(上)。シルバーバックの背中をすべり台にして遊ぶ子供ゴリラ。お父さんゴリラは子供たちの面倒を非常によく見る(下)(写真提供:山極寿一氏)。



やまぎわ・じゅいち●1952年東京生まれ。京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。カリソケ研究センター客員研究員、(財)日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手を経て、現在京都大学大学院理学研究科教授。著書に『ゴリラとヒトの間』『家族の起源—父性の登場』『ゴリラの森に暮らす—アフリカの豊かな自然と知恵』『父という余分なもの』『ゴリラ雑学ノート』『ジャングルで学んだこと—ゴリラとヒトの父親修業』『オトコの進化論—男らしさの起源を求めて』『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る』など多数。  
http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/yamagiwa/

## ゴリラに学ぶ人間の父親像

ユータウンには、神社とか人知の及ばない自然がないでしょ。すべてが計算され尽くし、値段がついているわけ。そうすると子供だつてこの土地はいくら、家はいくら、と自分たちがずっと住み続けるところがこういう値段のついたものでしかないとかわかってしまう。それでは地元を誇りがもてなくな。求心力は失われますよね。

地域の人が大切に守るお社とか民俗芸能、あるいは六〇〇年を超える屋久島の縄文杉のような自然があれば、人間は畏敬の心を持つ。それを後の世代にも伝えようとする。そういったものがない場所は、荒んでしまつてしまいます。ゴリラという人智の及ばない象徴が求心力を持てば、そういう荒廃から立ち直れるかもしれません。

—先生はゴリラを研究しているうちに、人間の家族のあり方や父親についてまでお考えになるように変化されましたね。  
山極 僕の世代は「親子の断絶」などと言われました。僕は子供を

育てるとき、自分の父親ではなく、研究対象のマウンテンゴリラのオスだったらどうするか、考えたものです(笑)。  
ゴリラのオスは乳児期を脱した子供たちの面倒を非常によく見る

んです。雷おやじと言うのか、厳しいけれど愛情深い。威厳もあります。そもそも僕は、ゴリラを見ていなかったら結婚しなかったかもしれない。フィールドワークでほとんど日本にいませんでしたから。—それでは、何がきっかけで結婚なさったのですか。

山極 僕は若い頃あまり子供が好きじゃなかった。子供って大変だなと思つて。だけどゴリラの群れを観察していると、いいんですよ。オスと子供が一緒にくつろいでいる光景が特にいい。

僕が一番ゴリラから学んだことは、父親は見られる存在だということです。子供からも、他の大人からも。子供たちは一番信頼のおけるオスについて歩きます。オスはその信頼を裏切つてはいけません。ころころ変わつてはいけません。

アフリカに子供を連れていくと、現地の人と家族ぐるみのつきあいができるんです。面白かったのは、それまで僕は「ヤマギワ」とか「ジユイチ」って自分の名前と呼ばれていたのに、子供と行く「ババヤカイシ」「ババヤチャ

サ」と呼ばれるようになった。「ババ」は父親のこと。カイシの父、チャマサの父という意味です。つまり僕は僕の名前で生きるんじゃない、子供の父としてみんなに認められ呼ばれるようになった。それはゴリラの世界とよく似ています。その子供から信頼されなくなつたら、僕はもう存在価値がないでしょう？

恐らく人間ってそういうものじゃないかと思うんです。霊長類の一員としてのヒトの男や、ゴリラのオスにとって、子育てのネットワークに参加するのはとても不思議なことです。僕は以前『父という余分なもの』(新書館)という本を書いたことがあります。父親というのは生物学的には余分なものだけれど、そこにこそゴリラとしての人間としての独特な社会性が潜んでいるということなんです。それは家族を核とした環境の中で、鍛えられるものなんです。

—父親のあり方を考える上でも興味深いお話ですね。今日はどうもありがとうございました。

聞き手/日本銀行情報サービス局長 恵谷英雄